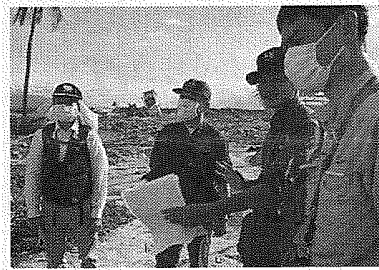


復興支える日本人に期待

インドネシア被災現場を調査

立員 足参議院議



左から、多田さん、足立議員、早川さん、山越国際課長

足立敏之参議院議員は、災害対策をライフワークにしている一環で、今月5日から6日にかけて、インドネシア中部・スラウェシ島の現場調査を行った。この島は、面積19万平方キロ、人口1740万人の島で、昨年9月に地震・津波で被災し、死者・行方不明者は約3500人に及んだ。

この災害で、驚くべきことは、液状化によって「地盤が大規模流動した」とだと、足立議員は指摘する。日本で見られる液状化と違い、甚大な被害

が生じたベトボ地区では、勾配が1%程度と非常に平坦な土地であるにも関わらず、液状化によって幅1キロ、長さ2.5キロものエリアが丸ごと、一方向に流されたからだ。1千戸を超える家屋が流されたり破壊された

が、流動化した土砂に人が呑み込まれたりした。この地区以外にも、同様の現象が発生したことで、津波による死者・行方不明者約500人に対し、液状化による死者・行方不明者は約3000人にのぼると言う。

日本では見られない被害は、シノノオゲ地区でも見られたと、足立議員は指摘する。この地区も平坦であったにも関わらず、幅1.5キロ、長さ3.5キロの範囲で、液状化

り、流動化した土砂に人が呑み込まれたりした。この地区以外にも、同様の現象が発生したことで、津波による死者・行方不明者約500人に対し、液状化による死者・行方不明者は約3000人にのぼると言う。

この調査に協力したのが、災害の発生前からJICAの専門家としてインドネシア政府に派遣されていた、多田直人さんと、早川潤さんだ。また、国土交通省水管理・国土保全局の廣瀬昌由河川計画課長、防災・地すべり技術センターの山越隆雄国際課長も、今回の調査

同行した。

による大規模な流動が発生。それに加えて、洪水も発生した。ただの洪水ではない。「被災地下水の流出が原因と考えられる洪水」だ。圧力がかかった地下水で洪水が発生するような現象は「初めて聞く」と足立議員は語る。このほかにも、各所で被災状況を調査した。

今後、多田さんと、早川さんは、災害のメカニズムの解析を進めるとともに、現地の復旧・復興計画の策定などを進めることとなる。この2人の日本人なくして、現地の復興は果せないと足立議員は語り、危機管理や治水などのスペシャリストである日本人技術者の活躍に期待を寄せた。

また足立議員は、今回の調査で日本では見られないような現象も生じていたものの、「日本も扇状地や被圧地下水が高い所もあるため、日本で同様の減少が今後、発生しないとは限らない。こういう現象に対する備えを、この災害から学んでおく必要がある」と総括した。